

厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業）
「公衆衛生医師の確保に係る自治体と地域の大学との連携及び自治体における
インターンシップ事業推進のための研究」
令和7年度 分担研究報告書

公衆衛生医師インターンシップに関するワークショップ
（「理想の公衆衛生医師インターンシップ」に関する自由回答の共起ネットワーク分析）

研究分担者 藤井 仁 目白大学 看護学部

研究要旨

【目的】公衆衛生医師インターンシップに関するワークショップで得られた自由回答データを用い、①公衆衛生医師が充実感を感じる業務と学生・事務官が抱く象徴的業務の認識、②インターンシップで「見せたい業務」と「見たい業務」の認識について、それぞれの共通点と差異を明らかにすることを目的とした。また、公衆衛生医師の職務理解における認識ギャップの構造を把握し、教育的示唆を得ることを目指した。

【方法】第57回日本医学教育学会におけるワークショップ参加者（公衆衛生医師・大学教員、医学生、自治体事務官）を対象に、グループワークおよび全体討議を実施した。公衆衛生医師側には「充実感のある業務」「見せたい業務」、学生・事務官側には「象徴的業務」「見たい業務」をそれぞれ自由回答で収集した。発言単位でデータ化し、KHCoderを用いた共起ネットワーク分析を実施、Jaccard係数により語の関連性を評価した。各項目間で共通語と特有語を比較することで、認識の一致・不一致を分析した。

【結果】「健康づくり」「健康危機管理」「感染症対策」などは、実務の充実感と象徴的業務の双方に共通し、学生のイメージと実務の間に大きな乖離はみられなかった。一方、充実感の側には「制度設計」「事業の企画・実行」「多機関連携」など、社会実装に関わる業務が特徴的に現れたのに対し、象徴的業務では「データ分析」「疫学調査」「情報収集・説明」など分析・説明機能が強調された。また、インターンシップに関しては、「健康づくり」や「実務的活動」は見たい・見せたい双方で一致したが、「感染症対応」や「医療連携」は見せたい側、「データ分析」は見たい側に偏っていた。理由分析では、学生は業務内容や政策形成プロセスの理解欲求が強く、実務者側は職務の魅力や物語性の伝達を重視していた。

【結論】公衆衛生医師の業務のうち、健康づくりなど可視化しやすい領域では認識の一致がみられる一方、制度設計や情報発信など基盤的業務は学生に十分認識されていないことが示された。また、学生はデータ分析業務への関心が高いが、実務では必ずしも同程度に活用されていない可能性が示唆された。したがって、インターンシップでは制度運用や情報発信といった見えにくい業務を積極的に提示するとともに、データ活用政策の文脈を踏まえた教育内容を組み込むことで、学生の理解と関心をより高めることが期待される。

研究分担者

内田 満夫	群馬大学大学院医学系研究科数理データ科学講座
大澤 絵里	国立保健医療科学院公衆衛生政策研究部
佐々木由理	国立保健医療科学院公衆衛生政策研究部
杉山 雄大	国立健康危機管理研究機構国立国際医療研究所糖尿病情報センター
名越 究	島根大学医学部環境保健医学講座
野村 恭子	秋田大学学医学系研究科衛生学公衆衛生学講座
平本 恵子	広島県西部保健所
横山 勝教	香川県中讃保健福祉事務所

研究協力者

浅沼 一成	国立保健医療科学院
菊地 省大	東京都健康安全研究センター
高橋 千香	東京都世田谷保健所
藤井 俊吾	島根県県央保健所
町田 宗仁	国立保健医療科学院公衆衛生政策研究部
渡 三佳	国立保健医療科学院公衆衛生政策研究部

A. 研究目的

公衆衛生医師、公衆衛生を専門とする大学教員、医学生、県の事務官が集まり、理想とするインターンシップについてのワークショップを開催した。本研究ではこの時の自由回答のデータを用いて、大学教員や公衆衛生医師がインターンシップで見せたい業務と医学生や事務官などが見てみたい業務の共通点と差異を明らかにする。また、公衆衛生医師にとって充実感がある業務と、公衆衛生医師として象徴的だと思う業務についても、共通点と差異を明らかにする。

B. 研究方法

(1) 研究対象

第 57 回日本医学教育学会において、「みんなで作ろう！理想の公衆衛生医師インターンシップ」と題して、ワークショップを開催した（2025 年 7 月 26 日(土)15:40～17:10）。ワークショップ参加者は、公衆衛生医師 16 名、医学生 6 名、自治体事務官 3 名、その他 1 名だった。ワークショップの中で、公衆衛生医師（大学教員含む）グループと医学生・事務官グループにわかれて、グループワークにて意見交換をしたのちに、さらに全員で意見交換を実施した。

(2) 情報収集の内容

公衆衛生医師グループ

- ①公衆衛生医師にとって充実感がある業務
- ②インターンシップで参加者に見せたい業務

医学生・事務官グループ

③自分がイメージする公衆衛生医師の象徴的な業務

④自分がインターンシップで見たい公衆衛生医師の業務

(3) 分析方法

グループワーク時の自由意見を1発言1データとして取り扱った（客体は人物ではなく発言）。テキストマイニングには KHCoder Ver.3 を用いて、共起ネットワーク分析を行った。単語同士の共起関係の強さは Jaccard 係数を用いて表現した。①公衆衛生医師にとって充実感がある業務と③自分がイメージする公衆衛生医師の象徴的な業務、②インターンシップで参加者に見せたい業務と④自分がインターンシップで見たい公衆衛生医師の業務を比較して、どのような単語が共通して現れるか、片方の群にだけ現れる象徴的な単語は何かを明らかにした。

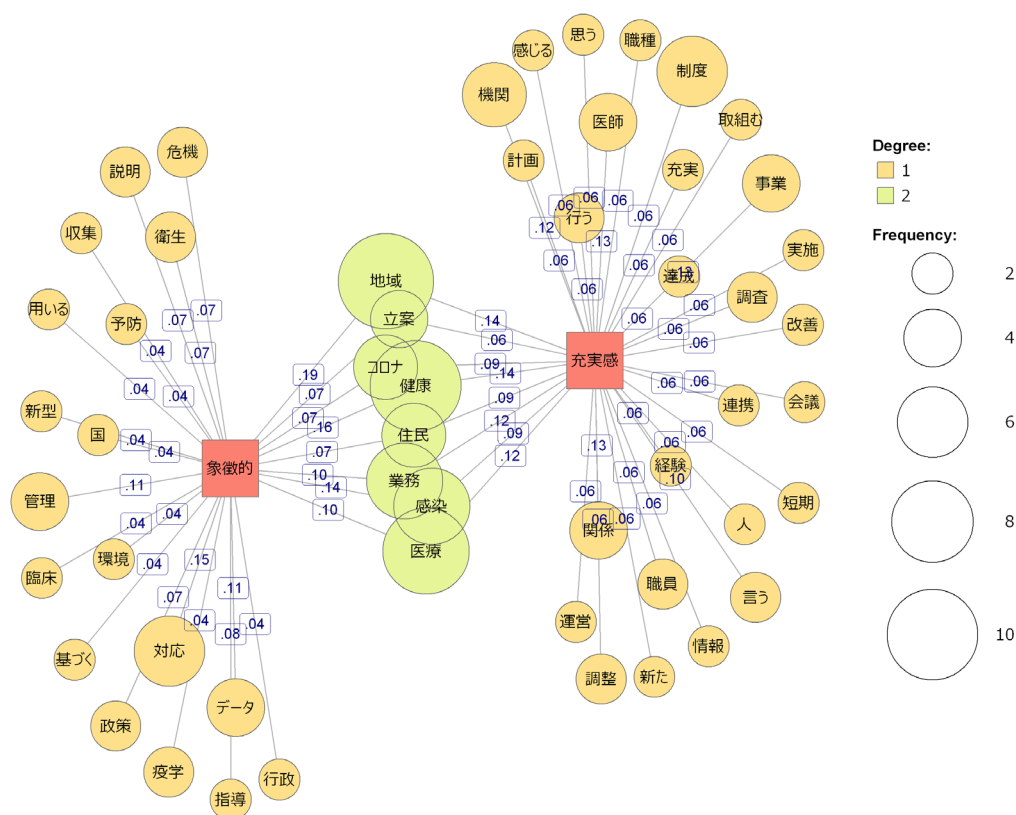
本ワークショップの実施に当たっては研究分担者以外の討議参加者と当日参加の参加者から、協力同意書により調査の意義や目的、結果の公表について事前に説明し、成果物の公表について同意を得ている。研究代表者、研究分担者以外の個人の特定につながる情報は公表されない。

C. 研究結果

公衆衛生医師 44、公衆衛生を専門とする大学教員 18、医学生 36、県の事務官 10 の発言が得られた。総抽出語数は 811 であった。

①公衆衛生医師にとって充実感がある業務で得られた意見を「充実感」、③自分がイメージする公衆衛生医師の象徴的な業務で得られた意見を「象徴的」という外部変数として扱い、共起ネットワーク分析を実施した結果が図 1 である。

図 1 公衆衛生医師にとって充実感がある業務と自分がイメージする公衆衛生医師の象徴的な業務の比較

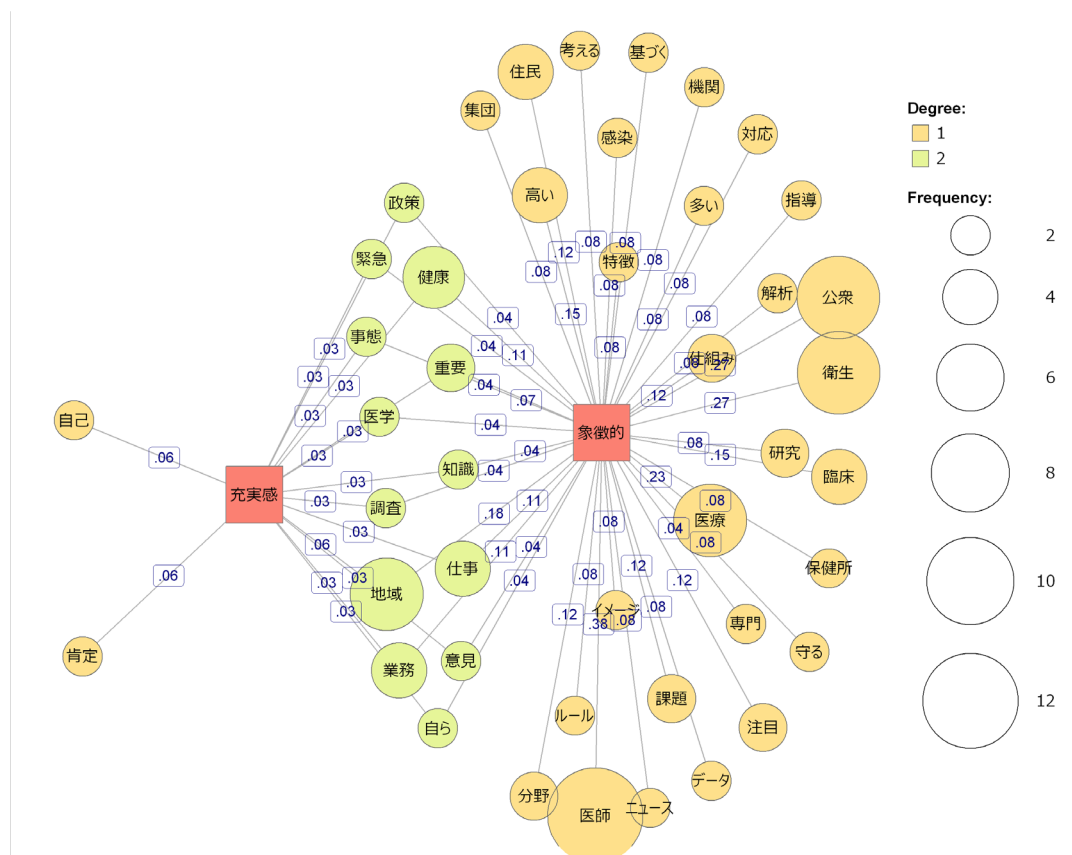


充実感がある実際の業務、象徴的な業務の双方に生じる単語が「健康」づくり、「健康」危機管理や、「感染」症対策などの単語であった。これらの内容は学生などのイメージと実際の業務との間にずれがないと考えられる。

それに対して「充実感」の側のみに現れる単語が、県民の暮らしや健康につながる事業や「制度」を作る、医師、公衆衛生の視点で「制度」、仕組みをより良いものに改善、他機関・他自治体と共に 1 つの「事業」を作り上げる企画・立案・実行役としての業務、仲間（職員、地域の関係者）と力を合わせて「事業」を実施などであった。

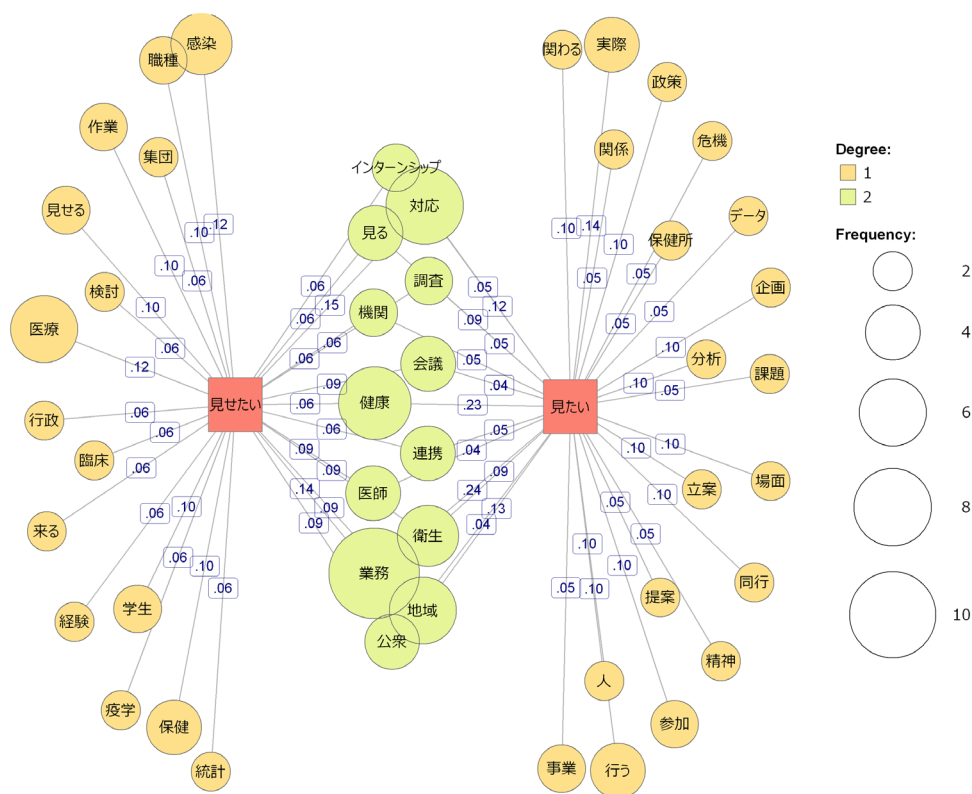
一方「象徴的」の側にのみ現れる単語が、「データ」に基づいて各種計画を策定する、「データ」を用いて地域の健康課題を明らかにする、地域の死亡率、疾病発生率等を「収集」して分析する、情報「収集」する、「疫学」調査、「疫学」を「説明」する、住民への「説明」などの業務内容だった。

図 2 公衆衛生医師にとって充実感がある業務と自分がイメージする公衆衛生医師の象徴的な業務を選択した理由の比較



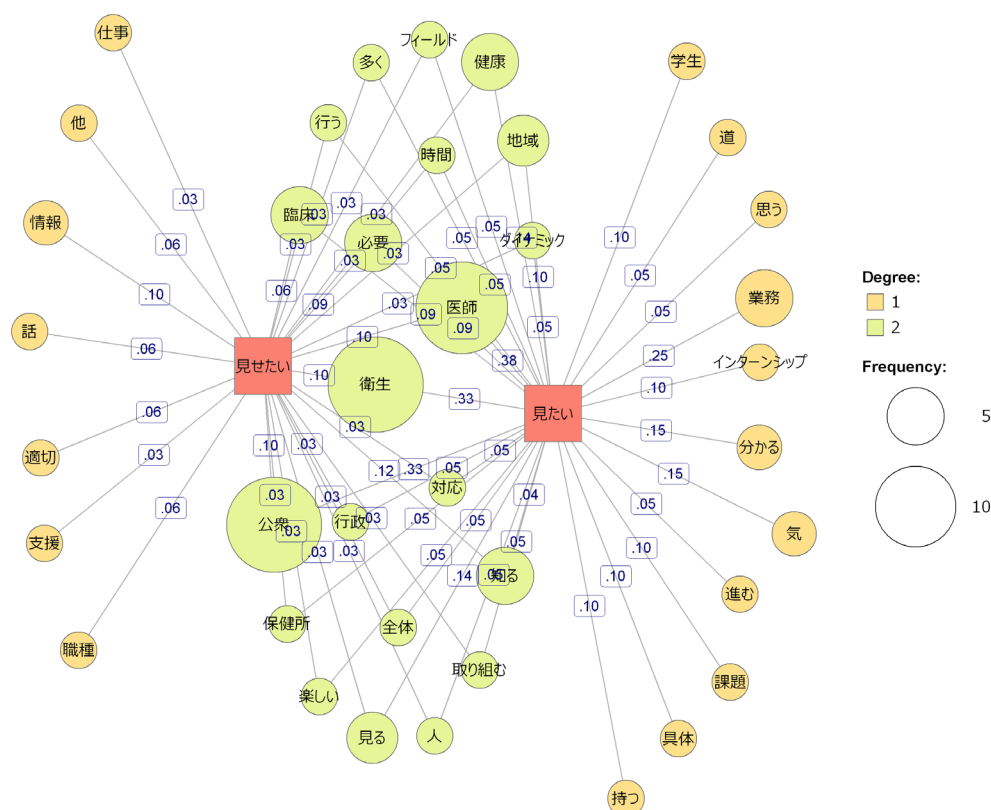
充実感がある実際の業務、象徴的な業務の双方に生じる単語は「健康」づくり、「健康」危機管理、「健康」の基盤づくり、「地域」保健、「地域」の健康づくりなどであった。それに対して「充実感」のみに現れる単語が「自己肯定」だった。「自己肯定感がやりがい、離職予防につながる」などの意見が見られた。実際に働いている公衆衛生医師は自己肯定感をもって職務をこなしていることが窺える。一方、「象徴的」のみに現れる単語が、「公衆衛生医師」の特徴的な仕事であるから、住民の健康危機に陣頭指揮をとる、「公衆衛生医師」の重要な業務であるから等の、公衆衛生医師の特有の業務であることを強調する意見が見られた。

図3 インターンシップで见たい業務と见せたい業務の比較



インターンシップで「見たい」業務と「見せたい」業務の両方に共通して現れる単語は、保健所等で「公衆衛生医師」が実際に行っている業務、「考え、伝える業務」困難な「公衆衛生」課題を係員と一緒に話し合うこと、「健康」づくり、「健康」啓発イベント、「健康」増進政策などであった。それに対して「見せたい」内容のみに現れる単語は「感染」症対応、「感染」症のアウトブレイクに対する初動対応への同行、「医療」機関とのつながり、地域「医療」、災害「医療」などであった。一方、「見たい」内容のみに現れる単語は、疫学「データ」、「データ」の分析業務、「保健所」等で公衆衛生医師が実際に行っている業務などであった。

図4 インターンシップで見たい業務と見せたい業務の理由の比較



インターンシップで見せたい理由、見たい理由の両方に現れる単語は、「公衆衛生医師」としての生き方を物語として理解しやすいから、「公衆衛生医師」の醍醐味が一気に経験できるから、「公衆衛生医師」ならではの業務などであった。他には「健康」教育、「健康」施策、「健康」課題などの単語が散見された。それに対して「見せたい」理由のみに現れた単語は「情報」発信する楽しさ、「情報」を伝えることなどであった。一方、「見たい」理由にのみ現れる単語は、公衆衛生医師がどのような「業務」に従事しているか、公衆衛生医師ならではの「業務」、デスクワークだけじゃないことが「分かる」、どういうプロセスで政策が作られているのかが「分から」ないから見てみたいなどであった。学生等が「業務」を「分かり」たいことが窺える結果となった。

D.考察

「公衆衛生医師」、「健康」づくりなどの単語に象徴される業務は、実際に従事しているものと、学生等の間で認識の差異が少なく、また、「見たい」と「見せたい」内容についても一致していた。「健康」増進政策や「健康」づくりは感染症対策や精神保健などと違って個人情報保護の問題や患者への配慮などの必要があまりなく、学生に見せやすく理解が容易なため、双方に差異がなかったものと考えられる。

一方で学生等が考える「象徴的」な業務であり、「見たい」業務に「データ」分析や疫学「データ」、情報「収集」などの単語が頻出している。健康づくりや地域診断等にデータが活用されるようになったのは比較的最近のことであり、国保データベースシステムが公開されたのは2012年、データヘルス計画が開始したのは2015年である。

学生が考えるほどにはデータを基にした施策が実施されていないことが、これらの結果につながったのではないかと考えられる。

「充実感」がある業務で「見せたい」業務の側だけに出てきた単語が「制度」、「業務」、「情報」と言った単語や「感染」症対応などの単語であった。学生等にとって、公衆衛生政策としての制度作りや法に基づく業務をこなすことが公衆衛生の基盤となっていることは想像の埒外だったと考えられる。また、保健所などが行う情報発信については、重要であっても対象者以外にとっては興味がわからない内容であることが多いのではないかと考えられる。例えば、麻疹の空白期間の人向けのワクチン接種の情報を、対象者以外が興味を持って見るとは考えにくい。なので、学生等にとっては見落とされがちな業務内容なのではないかと考えられる。「感染」症対応については、近年で最も大きな公衆衛生上の危機が新型コロナであったことを反映しているのではないかと考えられる

E.結論

制度設計や運用、情報発信などの、学生が想定していない公衆衛生上の業務については、公衆衛生医師の重要な仕事であることをインターンシップで取り上げることでより理解が深まると考えられる。また、近年急速に普及しているデータ基盤を活用した事業については、健康日本 21 以降のデータを重視した政策の流れを踏まえた上で、学生に紹介することが学生のニーズとも一致していると考えられる。

F.文献

なし

G.研究発表

1.論文発表

なし

2.学会発表

1. 第 85 回日本公衆衛生学会総会において発表予定

H.知的財産権の出願・登録状況

なし

【参考】ワークショップの概要

1. ワークショップの場の設定

班会議（12/23、1/26、4/30、6/18）において、ワークショップの設計、ロジスティクス等について検討を行い、第57回日本医学教育学会大会 in AKITA（秋田市）の場を活用することとした。

表題：みんなで作ろう！理想の公衆衛生医師インターンシッププログラム
日時：令和7年7月26日（土）15:50-17:20
場所：秋田市文化創造館 2F スタジオ A2
目的：インターンシップ実施側で提供したいものと参加者の求めるニーズのギャップを浮き彫りにし、今後インターンシップを企画する際の留意点として書き留める。
参加者：事前に指名した者及び当日参加した者

2. ワークショップの設計

参加者は、＜企画・提供側＞大学教員、自治体医師、自治体事務官、＜応募側＞IV学生・若手医師、の計4類型に分類した。当日は複数の種類の参加者を含む4班（A～D）に分かれ、それぞれが思い描くインターンシップの内容を明らかにする発散収束型のワークショップを実施した。

ワークショップに先立ち、事前に指名した討議参加者には以下の宿題を課し、当日持参させた。

（大学、都県の医師の方：背景が桃、青の方）

①公衆衛生医師が充実感を感じる業務とは何でしょう。その理由は。

＜メモを作る際に頭に浮かべるとよいポイント＞

- どのような業務で「やりがい」や「達成感」を感じましたか？
- そのとき、どのような成果や変化を実感しましたか？
- 逆に、「報われない」と感じた経験はありましたか？それはなぜですか？
- 医師としての臨床スキルや知識が、どのように役立ったと感じますか？
- 業務の中で、「公衆衛生医師としての自分らしさ」を感じる瞬間はありますか？
- チームや地域住民との関わりの中で、印象に残っているエピソードは？

②インターンシップで参加者に見せたい業務とは何でしょう。その理由は。

＜メモを作る際に頭に浮かべるとよいポイント＞

- インターンに経験させたい業務・場面には、どんな意図がありますか？
- 「これは魅力が伝わる」と思う業務や現場は？
- 学生が関心を持ちやすいようなエピソードや工夫はありますか？
- インターンシップ中に学生に感じ取ってほしいことは？
- 逆に、誤解されやすい業務や伝えにくい部分はありますか？

(県の事務官の方、大学生の方:背景が橙、緑の方)

③自分がイメージする公衆衛生医師の象徴的な業務とは何でしょう。その理由は。

＜メモを作る際に頭に浮かべるとよいポイント＞

- 「公衆衛生医師」と聞いて、どんな仕事や役割を思い浮かべますか？
- そのイメージは、どのような情報や経験から形成されたと思いますか？
- 具体的に「〇〇に取り組んでいそう」と思う業務は？
- 臨床医との違いをどう感じていますか？
- 「もっとこうあってほしい」と思う公衆衛生医師像はありますか？

④自分がインターンシップで見たい公衆衛生医師の業務とは何でしょう。の理由は。

＜メモを作る際に頭に浮かべるとよいポイント＞

- 現場で見たい／同行してみたい業務は何ですか？なぜですか？
- どのような働き方（忙しさ、役割分担）を想像していますか？
- 「こういう活動があれば魅力的」と思う業務はありますか？
- 逆に「これはあまり関わりたくない」と思う業務や印象は？
- 公衆衛生医師の活動の中で、学びたい・影響を受けたい要素は？

当日受付時に、研究分担者以外の討議参加者と当日参加の参加者から、ワークショップへの協力同意書を得た。

討議参加者は宿題①～④を自らの類型に割り振った色（大学教員：桃色、自治体医師：青色、自治体事務官：緑色、学生・若手医師：橙色）の付箋に転記し、討議に備えた。

討議参加者は医師グループ（大学教員と自治体医師）と学生・若手医師・事務官グループ（自治体事務官と学生・若手医師）に分かれて、それぞれ持ち寄った宿題の中で優れた内容のものを1項目につき4枚選抜し、それに対するコメントをつけた。現地参加者は自由に討議に加わった。

次いで、大学教員、自治体医師、自治体事務官、学生・若手医師、現地参加討議者が混在して編成した4グループ（A～D）に分かれて討議を行い、それぞれ「これからの保健所でのインターンシッププログラムとは」というタイトルでプレゼンテーションの作成を行った。作業に当たっては、「ア 自治体公衆衛生医入職への気持ちを高める体験とは ---『与えたいもの』と『求めたいもの』のギャップを通じて---」と「イ 当班作のプログラムのポイント・ウリはこれだ」という観点をいれるよう求めた。

最終的に4グループからそれぞれプレゼンテーション・質疑を行い、全体討論となった。

【当日の様子】

第57回日本医学教育学会大会 in AKITA ワークショップ
「みんなで作ろう！理想の公衆衛生医師インターンシッププログラム」

ワークショップ35/Workshop 35

当日参加OK

7月26日（土）15:50～17:20

会場：ワークショップ会場2（秋田市文化創造館 2F スタジオA2）

みんなで作ろう！理想の公衆衛生医師インターンシッププログラム
Internship program for public health physician

ワークショップ35 ▼ 要旨

座 長：野村 恭子（秋田大学医学部衛生学公衆衛生学）

名越 究（島根大学 医学部 環境保健医学講座）

ファシリテーター：

平本 恵子（広島市南区役所 厚生部／南保健センター）

横山 勝教（香川県中讃保健福祉事務所）

名越 究（島根大学 医学部 環境保健医学講座）

野村 恭子（秋田大学 医学系研究科 衛生学公衆衛生学講座）

杉山 雄大（筑波大学医学医療系ヘルスリサーチ分野）



【当日スクリーンに投影した説明】

第57回日本医学教育学会大会 in AKITA
ワークショップ

みんなで作ろう！ 理想の公衆衛生医師インターンシップ プログラム

令和7年度厚生労働科学研究
公衆衛生医師の確保に係る自治体と地域の大学との連携及び
自治体におけるインターンシップ事業推進のための研究
(24LA1001)

- ✓最初は属性（公衆衛生医師、学生など）ごとにⅠ～Ⅳ卓に着席してください。
- ✓宿題のメモをフェルトペンで付箋に転記してください。

<公衆衛生医師の記載例>

①公衆衛生医師が充実感を感じる業務
○○業務
○○を○○しているとき。

(理由)
××××はとても××なので

<学生の記載例>

③自分がイメージする公衆衛生医師の象徴的な
業務とは

○○業務
○○を○○しているとき。

(理由)
××××はとても××なので

ワークショップ開催のきっかけ

- ① 自治体での公衆衛生活動に興味を持っている**医師・医学生**が
インターンシップにやってきた時、何を目的にどのような準
備をしていればよいのでしょうか？
- ② 優先すべきは**自治体側**の事情、**公衆衛生医**の熱意？**医師・医
学生**の希望？
- ③ **大学**に求められる役割とは？

(今まで、一堂に会して議論したことがなかった)

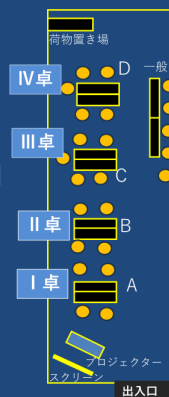
⇒ みんな考えていることがそれぞれ違うのでは

本日のメニュー

- I～IVのテーブルで宿題について検討、集約
- A～Dの班でプレゼン資料を作成
「これからの保健所でのインターンシッププログラムとは」
- 発表
- クロージング

非常にタイトな90分です。スムーズな進行にご協力願います。

打ち上げもあります。お楽しみに。



本日の手順 その1 オープニング～自己紹介・アイスブレイク

以下の話題を入れてください

(秋田県外から来た人)

「私が買おうと思っている秋田土産について」

(秋田県在住の人)

「私がお勧めする秋田土産について」

本日の手順 その2 (～16:20)

2. 医師G、学生・事務官Gでチームを組み、以下に記載の2つの項目について議論し、1項目につき4つの付箋を選ぶ。選んだ付箋を項目毎に付箋2つでシート1枚となるように貼ってコメントを入れる
<作成例>

各机担当の補助者は議論をサポート

- | | |
|-------------|------------|
| I卓 医師G | 項目①②について議論 |
| II卓 学生・事務官G | 項目③④について議論 |
| III卓 医師G | 項目①②について議論 |
| IV卓 学生・事務官G | 項目③④について議論 |

主観その3に備え、各自グループの感想を宮内氏保存

- ①公衆衛生医師が充実感を感じる業務とは。
- ②インターンに見せたい業務とは
- ③自分がイメージする公衆衛生医師の象徴的な業務とは
- ④見てみたい公衆衛生医師の業務とは

I卓 ①×2枚	II卓 ③×2枚	III卓 ①×2枚	IV卓 ③×2枚
コメント -----	コメント -----	コメント -----	コメント -----

I卓 ②×2枚	II卓 ④×2枚	III卓 ②×2枚	IV卓 ④×2枚
コメント -----	コメント -----	コメント -----	コメント -----

卓の番号と項目番号をホワイトボードマーカーで記入

本日の手順 その3 (～16:35)

3. A～D班に分かれます（Ⅰ～Ⅳ卓）。手順2で得たシートを各項目1枚ずつ各班に持ち帰ります。
各班①②③④の4枚のシートが揃うはず

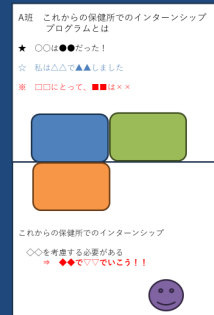
I	A				
II	B				
III	C				
IV	D				

アとイの観点を踏まえてそれぞれプレゼンテーションを作成

表題「これからの保健所でのインターンシッププログラムとは（〇班）」

- ア 自治体公衆衛生医入職への気持ちを高める体験とは
「与えたいもの」と「求めたいもの」のギャップを通じて
イ 当班作のプログラムのポイント・ウリはこれだ

プレゼンテーションは、ホワイトボードフィルム（1班当たり2枚）に記入
<作成例>



各机担当の補助者はプレゼン資料を写真で保存のこと

本日の手順 その4 (～17:20)

4. A～D班それぞれ発表（各班5分）

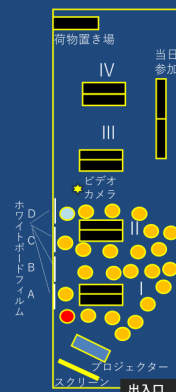
<発表者>

- A 〇〇様（α自治体）
B 〇〇様（γ自治体）
C 〇〇様（β自治体）
D 〇〇様（Δ自治体）

通して発表後 質疑含め20分間の全体討論

5. 17:15～ 国立保健医療科学院 浅沼院長 ご講評

各机担当の補助者はプレゼン資料を写真で保存のこと



3. 参加者

全体の参加数は 32 名。事前指名の討議参加者は 19 名（大学医師 2 名、自治体医師 9 名、自治体事務官 2 名、学生 6 名）、現地参加の討議参加者は 7 名（内訳不明）、進行役は 6 名であった。

		所属	属性	役割
	名越 究	島根大学	医師	進行
	内田満夫	群馬大学	医師	進行
	藤井 仁	目白大学	研究者	進行
	浅沼一成	保健医療科学院	医師	進行
	渡 三佳	保健医療科学院	医師	進行
	町田 宗仁	保健医療科学院	医師	進行
1	野村 恭子	秋田大学	医師	ファシリテーター
2	杉山 雄大	筑波大学	医師	ファシリテーター
3	横山 勝教	香川県	医師	ファシリテーター
4	平本 恵子	広島県	医師	ファシリテーター
5	藤井 俊吾	島根県	医師	討議
6	菊地 省大	東京都	医師	討議
7	〇〇	自治体1	医師	討議
8	〇〇	自治体2	医師	討議
9	〇〇	自治体2	医師	討議
10	〇〇	自治体2	医師	討議
11	〇〇	自治体3	医師	討議
12	〇〇	自治体1	事務官	討議
13	〇〇	自治体3	事務官	討議
14	〇〇	大学1	学生	討議
15	〇〇	大学2	学生	討議
16	〇〇	大学2	学生	討議
17	〇〇	大学3	学生	討議
18	〇〇	大学3	学生	討議
19	〇〇	大学4	学生	討議
20	〇〇	現地参加1	—	現地参加・討議
21	〇〇	現地参加2	—	現地参加・討議
22	〇〇	現地参加3	—	現地参加・討議
23	〇〇	現地参加4	—	現地参加・討議
24	〇〇	現地参加5	—	現地参加・討議
25	〇〇	現地参加6	—	現地参加・討議
26	〇〇	現地参加7	—	現地参加・討議

4. プレゼンテーションの概要

ワークショップ後半、A～D 班から下記のような発表があった。

A 班

①公衆衛生医師が充実感を感じる業務 ②インターンシップ参加者に見せたい業務	③イメージする公衆衛生医師の業務 ④見てみたい公衆衛生医師の業務
● 集団発生の疫学調査 ● 地域での個別支援 ● 他機関、他自治体と共に一つの事業を作り上げる。企画立案、実行役としての業務 ● 医師・公衆衛生の視点で制度、仕組みをより良いものに改善する。医療者と行政をつなぐ(救急医療体制などの見直し、制度設計)	● 企画・提案書の作成と、実際の関係者への提案 ● 地域や住民の人と関わっている場面を見たい ● 統計やデータを踏まえてその地域における医療上の問題点や課題点を見つけ出し、その解決を行う。 ● 幼児健診
【コメント】 提供側は地域や他機関との対話、一貫した業務の流れを見せたい 参加側はデスクワーク以外が見たいようだ	

B 班

①公衆衛生医師が充実感を感じる業務 ②インターンシップ参加者に見せたい業務	③イメージする公衆衛生医師の業務 ④見てみたい公衆衛生医師の業務
● 調整役、交渉役 ● 仲間(職員、地域の関係者)と力を合わせて事業を実施(コロナ禍の医療) ● 県民の暮らしや健康につながる事業や制度を作る、動かす(地域枠、修学資金制度の創設) ● 住民などへの発表の場 ● 他機関・多事事態と共に行う大きな事業のプロセスや事業運営を行う様子	● 環境衛生が住民に説明する業務 ● 依存症や引きこもりをはじめメンタルヘルスについて ● データの分析業務に実際に取り組む
【コメント】 提供側は他機関とのコミュニケーションなど仕事の中身を見せたい(学生が見たいものを意識していなかった) 参加側はこれまでしたことがない体験がしたい	

C 班

①公衆衛生医師が充実感を感じる業務 ②インターンシップ参加者に見せたい業務	③イメージする公衆衛生医師の業務 ④見てみたい公衆衛生医師の業務
● 健康危機管理 ● 毎週の web 会議で感染症の情報を発表しているとき ● 集団感染症や結核事例の拡大防止に向けた調査検討 ● 食中毒、新型コロナなどの健康危機対応 ● 「打合せ、会議回し、外部(特に医療者との)調整・交渉」行政組織に医師がいるメリットを直接見てもらう、公務員として与えられた業務の中で医療者としての知識、経験をどう活かしているか考え、伝える業務	● 健康に関わる政策立案 ● 健康増進政策の立案会議への参加 ● 人口動態の調査
【コメント】 この班では提供側と受け手のギャップはあまりなかったようだ。 短時間で体験させるためにはプログラム作りが大切	

D 班

①公衆衛生医師が充実感を感じる業務 ②インターンシップ参加者に見せたい業務	③イメージする公衆衛生医師の業務 ④見てみたい公衆衛生医師の業務
● 医療監視 ● 地域課題を分析したうえで行う、市町村と連携した健康づくり事業 ● 地域の関係機関や住民を含む会議体での挨拶や運営 ● 職員や関係機関とのオープンダイアログのトレーニング ● 自殺対策など地域の取組の検討会議 ● 各種統計の取りまとめと計画の原案の策定	● 感染症に対する疫学調査 ● 食品衛生関連業務
【コメント】 受け手側から、ドクターがやっている業務以外を見たいという希望があったのは意外だった。 提供側は「所長の立場」で見せたい業務が選ばれていたようだ	

5. 全体討論での主な発言

各班発表後の全体討論では、以下のような意見が出た。

- ・ 初期研修医時代、1 か月保健所で研修し業務を一通り見る事ができた。1 か月ぐらいあると理想的なのかもしれない。
- ・ データ解析や企画の立ち上げの流れが見たいというのを考えた時に長期のインターンシップ期間がほしい。
- ・ 対人、コミュニケーションが見るなら、1 週間ぐらいはしっかり取り組んでその後も空き時間に 1 か月ぐらい関りを持っているようなインターンシップの構成も考えられる。
- ・ 医師の仕事だけではなく他の職種とどのように関わっていくのかインターンで実際に見ることができたら更に保健所の業務の理解が深まる。
- ・ 研修を 1 日程度見て入ってきても、1 日だけだとギャップがあって辞めてしまうというケースがあるので、ある程度長期間で保健所業務を知ってもらって保健所に入ってもらおうと良い
- ・ 見せる方としては、保健所長の仕事を考えてプログラムを組んできたが、見る方からどこを見たいのか聞いた方がいいのだなと分かったので、次回からはそうしたい。
- ・ 見に行く側としては、保健所の仕事、保健所長の仕事、医師の仕事の区別を知らなかった。
- ・ 医師は、行政官としての立場、医療現場を知る立場、業界とのつなぎ役という立場など使い分けるほか、衛生監視については現場をほかの職種に任せて最後の責任者という感じだろうか。いろんなハイブリッドな目を持っている双方向性の役割を演じることができるという面では唯一無二の存在かもしれない。